

【論文】

カナダの「レッドトリー」の衰退と保守派の変容： 故ヒュー・シーガルの視座

田 中 俊 弘

はじめに

アメリカ合衆国の医療保険問題を主題にしたマイケル・ムーア (Michael Moore) 監督のドキュメンタリー映画『シッコ (SICKO)』(2007 年) には、カナダ保守党 (Conservative Party of Canada) の党員であるインタビュー対象者が、ユニバーサルヘルスケア (国民皆保険制度) を当然視する様子にムーアが驚くシーンがある。自ら医療費を賄えない人については誰かがその面倒を見なければならないと述べて、「その人物がどの政党の党員であっても、医療に関してはカナダでは関係がない」と言い切ったその相手が、社会主義政党ではなく保守党に属していたことに混乱するムーアの様子が [Moore 2007]、社会保障問題に対する加米両国のアプローチの差異を際立たせている。アメリカにおいては 2016 年と 2020 年の大統領選挙で民主党候補者指名を目指したバーニー・サンダース (Bernie Sanders) 上院議員がリベラル左派の立場で争点にしたユニバーサルヘルスケアを [Sanders n.d.]、カナダでは保守派も含めて国民の大半が受容しているのである。

この事例に限らず、同じ保守派でもアメリカの共和党とカナダの進歩保守党 (Progressive Conservative Party of Canada) の主流は立場が異なってきた¹。もちろん、同じ国内であっても保守派の主張は多様であるが、歴史的にみ

ると、カナダではよりリベラル寄りの立ち位置を採る保守主義者が多かった。ただし、実際にそうした傾向がはっきりしていたのは 1993 年選挙までであり、その後 2006 年から約 10 年間政権に就いたスティーヴン・ハーパー (Stephen Harper) の新しい保守党は、20 世紀の進歩保守党とは別物であり、アメリカの共和党の主張に近づいてきたように見える。

昨今、保守主義とは何かを問い直す論考は本邦でも見られるが [宇野 2019 など]、本稿は、それらも参照しながら、カナダの 2 つの保守主義の特徴と変遷を取り扱う。そしてリベラル寄り保守派「レッドトリー (Red Tory)」—20 世紀中のカナダ保守派の主流—の論客とみなされてきたヒュー・シーガル (Hugh Segal, 1950-2023) の立ち位置を検証し、それを現代カナダの保守主義の潮流に位置付けて、レッドトリーの衰退と保守の変質を明らかにする試みである²。なお、ここでいうレッドトリーとは、基本的な人間の尊厳を守るための政府介入や、自由市場のある程度の制約をやむなしとする立場である。それは、自由市場を重視する経済自由主義と道徳的伝統主義の結合を特徴とする新保守主義に傾倒する保守派が増えた現代においては少数派となっているのだ³。

2023 年 8 月 9 日に 72 歳でその生涯を終えたシーガルは、ベーシックインカム (基礎所得保障) をめぐる議論に

¹ カナダの連邦レベルでは進歩保守党とカナダ改革・保守連合 (Canadian Reform Conservative Alliance) が合同して 2003 年に誕生した保守党が保守勢力を代表する政党となったが、州レベルではいまだに進歩保守党の党名を冠する場合が多い。なお、カナダでは連邦政党と州政党の組織的繋がりは弱く、連邦の保守党が州の進歩保守党／保守党の政策を支持するとは限らない [加藤 2002: 147]。

² シーガルは 2006 年の著書では自身を「初期保守主義者 (paleo-conservative)」と称し、レッドトリーその他と分けているが、差異を具体的に説明していない [Segal 2006: No.2513/3744]。おそらくカナダの保守党が創設された 19 世紀の保守派の流れに自らを位置付けた表現であろうが、その後は彼はレッドトリーと呼ばれるのを受け入れている。例えば 2011 年のシーガルの著書序文ではパメラ・ウォーリン (Pamela Wallin) 上院議員が彼をそう呼んでいる [Segal 2011: No.111/3689]。

³ ファーニーらは、保守主義を大きくトリー主義、新自由主義、そして新保守主義に分類し、このうち後の 2 つはどちらも自由市場と小さな政府を目指す同じ立場を指すことが多いが、後者は自由市場を重視する経済自由主義と道徳的伝統主義の結合として説明される場合もあるとしている [Farney & Rayside 2013: 4]。なお、カナダではこの後者 2 つをまとめてブルートリー主義と称することもある。

において長年にわたってカナダ政治の場で牽引役を務めてきた人物であり、政策立案者・政治家・研究者の顔も持っていた。モンリオールの貧しいユダヤ系家庭に生まれ育った敬虔なユダヤ教徒の彼は、高校時代にジョン・ディーフェンバカー（John Diefenbaker）首相（カナダ進歩保守党）が来校して行った演説に心打たれて、進歩保守党員としての道を歩んだ [Segal 2019: 24-31]。1977 年から 1988 年には、オンタリオ州進歩保守党政権でビル・デイヴィス（Bill Davis）首相の首席補佐官を、そしてアメリカ合衆国共和党のロナルド・レーガン（Ronald Reagan）大統領との蜜月関係を背景に北米自由貿易協定を締結したブライアン・マルルーニー（Brian Mulroney）連邦首相（進歩保守党）の下で 1992 年から政策アドバイザーを務めた他、1998 年にはカナダ進歩保守党の党首選に出馬した経験を持つ。その後、2005 年から 2014 年までは上院議員を務め、外交・防衛政策の専門家として国防の重要性について発言を重ねながら、他方では貧困撲滅の施策の必要性を主張し続けた。

シーガルがカナダ政治の重要なアクターの 1 人であった 1993 年に、進歩保守党は下院の 295 議席中 156 議席を有していた政権与党からわずか 2 議席の泡沫政党へと転落した。その後、カナダ西部を基盤に勢力を拡大した改革党（Reform Party of Canada）とその後継のカナダ改革・保守同盟（以下アライアンス）が一部の進歩保守党員と合流して新・カナダ保守党を誕生させ、2006 年にはハーバー首相の下で政権党へと返り咲いたが、上にも述べた通り、それはレッドトリーとは一線を画する別の保守主義を信奉していたのである。

シーガルはこうした保守派の変質と離合集散の時代に関わりながら、自分が考えるカナダ保守主義の在り方をいくつもの著作で説明してきた。本論ではそのうち特に 4 冊の著書を参照したが [Segal 2006, 2011, 2016, 2019]、*The Long Road Back*（2006 年）では、第二次世界大戦後の進歩保守党が機能不全に陥った状況を批判しつつも保守思想の重要性を強調した。*The Right Balance*（2011 年）ではカナダ保守主義のルーツや歴史を解説し、*Two Freedoms*（2016 年）では、保守主義者の視点からカナダ外交がどのような立場を採ってきたか、今後採るべきかを論じた。そして自伝的著作の *Boot Straps Need Boots*（2019 年）では、彼の幼少時からの生活や関心が保守主義やベシックインカムを含む彼の世界観を構築してきた状況を説明した。理論家という以上に政治の現場での政策立案者であった彼の経験と視座は、現代カナダ保守主義の潮流を把握する上で重要であろうし、彼のようなレッドトリーが影響力を失っていく過程を当事者視点を交えて検証することで、カナダの政治文化面の変化を理解する一助となる筈である。

そもそも現代は、保守・リベラルにかかわらず主要政

党がよりリベラルな政策を軸に収斂してきた「リベラル・コンセンサス」の時代であるし [吉田 2020: 124]、とりわけカナダは、20 世紀以降政権に就く期間が長い自由党（Liberal Party of Canada）が「国民的かつ生来の政権与党（national and natural governing party）」と称される状況にあるために [Segal 2011: 216]、保守主義に関する研究が充実しているとはいえないが、本稿との関係ではジェームズ・ファーニー（James Farney）らの研究が参考になる [Farney & Rayside 2013]。また邦語でも、加藤普章によって時系列を踏まえた分類と検討がなされているし、レッドトリーやその代表的知識人とされるジョージ・グラント（George Grant）については、岡田健太郎や清滝仁志の論考がある [加藤 2002；岡田 2013；清滝 2017]。本稿は、それら先行研究の成果を踏まえながら保守主義思想自体の特徴に触れた後、カナダにおける保守主義の諸相と、特にその内のレッドトリーと称される立場を整理して、その衰退と新保守主義への移行を説明する。そしてシーガル自身がカナダの正統派と位置付けた保守主義を明らかにして、それを現代カナダの政治思想の文脈に位置づける。

1. 保守主義の特徴

そもそも保守主義とは何かを論じるのは容易ではない。保守すべきだと信じる対象が時代や国と地域、あるいはこの語の使用者によって異なる場合も多い。政治思想研究者の宇野重規が指摘するように、現代においては、それは男女平等やジェンダーフリーの思想に対する批判的立場を示す場合もあるし、外国人に対する警戒を示したり自国愛を強調する立場や、行政の役割を削り落とした小さな政府論者を指すこともある [宇野 2019: i-ii]。

保守派を批判する文脈では、弱者への配慮や多様性を認めず、旧来の階級秩序や社会秩序に固執して変化に抗う立場として描かれがちだが、それは必ずしも正しくない。宇野はしばしば保守主義の祖として扱われるアイルランド生まれのイギリス人エドモンド・バーク（Edmund Burke, 1729-1797）の思想を整理しながら、「①具体的な制度や慣習を保守し、②そのような制度や慣習が歴史のなかで培われたものであることを重視するものであり、さらに、③自由を維持することを大切に、④民主化を前提にしつつ、秩序ある漸進的改革を目指す」のが保守主義だと説明した上で、単純な変化への嫌悪や伝統主義、あるいは復古主義とは区別すべきだと主張している [宇野 2019: 155]⁴。この定義に従えば、現状を少なくともある程度肯定し、革命のような形での過去との断絶は否定しながら、緩やかな変化を容認する姿勢こそが本来の意味での保守主義だと定義できよう。

なお、ここで注意すべきは③の自由が扱う内容である。

⁴ バークは周囲からはそれまでの言動からフランス革命に賛同すると思われていたが、実際には漸進的な変化を拒む革命を批判する立場をとった。なお、保守主義の祖とされるバークがリベラリズムの理論的支柱でもあり、後の自由党となるホイッグ党から議員に選出されている点にも留意する必要がある [吉田 2020: 97-98]。

保守主義における自由は、リベラリズムが希求するそれとは異なる。保守主義者にとっては、国家や政府による規制や制約からの自由が重要であり、だからこそ小さな政府という方向性と結びつくが、例えばリベラリズムで当然視されるジェンダーフリーのような個人の内面的な価値観追求の自由に対しては反対もしくは留保する場合もある〔久米 2011: 52〕⁵。大きな政府を否定すると共に個人の自由の過剰を批判する保守派の議論は、— あくまでも「リベラル・コンセンサス」時代の制約の中であるにせよ — 現代世界において高まりを見せている。各国で新自由主義政策が採用されているのも、多文化主義が多くの場所で批判に晒されているのも、社会の保守化傾向とみなすことができよう。ジャーナリストの中岡望は、アメリカにおける新保守主義を扱った著作で、それが「政府が社会のあらゆる問題を解決できる」かのようなリベラリズムの「楽観主義」を批判する形で登場したと説明している〔中岡 2004: 13〕。福祉国家として肥大化した政府が、実は効率的に問題を解決してこなかったとの見方や、個人の自由を過剰に認めているという批判が、保守の台頭をもたらした背景にあるのは明らかである。後述するレッドトーリー主義者は、政府の役割などについて立場を異にするが、とはいえシーガルもこうした批判を根底に持ちながら、政府を肥大化させない形での効率的な貧困対策を目指してベーシックインカムを主張してきたのである。

国や地域別の保守主義の差異に話を戻すが、政治学者の久米郁男らによれば、1950年代以降の日本における保守とリベラルの対立軸は、憲法改正問題、防衛・外交政策、労働者のストライキといったテーマであり、中でもとりわけ防衛・外交の問題が両者を隔てる争点になってきた一方で、社会福祉か減税かという戦後の欧米では重要な対立軸が、日本では保守とリベラルに色分けできない形で議論されてきた〔久米 2011: 13-15〕。本稿冒頭で触れたとおり、同じ北米多民族国家として比較されることの多いカナダとアメリカでも保守主義の主流は— 少なくとも20世紀中は— 異なっていた。そもそも、独立革命によって宗主国や過去からの断絶から出発したアメリカでは、肯定すべき過去は独立宣言以前には遡らないし、独立後にヨーロッパ社会が経験した過去を保守しようとする意識が育つはずもない。ラディカルな個人主義や市場経済主義など、保守のルーツとみなされる思想は第二次世界大戦以前からあったとはいえ、アメリカで保守思想の体系化が進むのは1950年代以降であった〔中岡 2004: 13-19〕。それに対して、植民地独立に反対した親英派のロイヤリストたちがアメリカ独立革命後に流入してイギリス系社会の中心となり、その後も立憲君主制を維持するカナダでは、イギリス的な政治伝統が保守すべき対象となりうる。そのためいわゆるトーリー主義が保守主義の重要な一要素となった。

イギリスの保守党の前身政党の名称であり、今でも保守党の愛称として使用されるトーリーの起源は17世紀にまで遡る。1679年から1681年にかけて、英国王チャールズ二世の王位継承者としてカトリック教徒の弟ヨーク公チャールズを認めるべきかどうかで議会内に対立が生じた際、容認派はゲール語で無法者を意味する語から派生したトーリーの名で批判的に呼ばれたが、1689年以降はそれが党派名になった〔Padmanabhan 2015〕。そして名誉革命前の絶対王政の時代に、王権と英国国教会、すなわち権威と宗教を擁護する立場がトーリー主義の根幹になった。

しかし現代的な意味でのトーリー思想を形作ったのは19世紀イギリスのベンジャミン・ディズレイリ（Benjamin Disraeli）であったとされる〔Marshall 2023〕。富裕層と貧困層の分断をなくして1つのイギリスを作り上げようとする彼のワンネーション・トーリー主義は、カナダの保守主義にも大きな影響を及ぼした。シーガルは、カナダのトーリー主義を単なる外国から持ち込まれた思想とは捉えず、「カナダの地理、人口構成、気候、コミュニティ、そしていくつもの世代の積み重ねが、世界の他のどこにも真似できない独自の保守主義を形成してきた」のだと主張し、カナダの場合には地域と民族による分断を乗り越えることもワンネーション・トーリーの重要な目標に含まれてきたと説明する〔Segal 2011: 1, 217〕。

このようにカナダのトーリー主義はイギリスのそれに影響を受けつつ独自の色合いを帯びていったが、次節以降でその特徴を掘り下げ、また、レッドトーリーに代わる新保守主義の特徴と、前者から後者への重心移動の実情についても論じていく。

2. カナダの保守主義：レッドトーリー主義と新保守主義

カナダ政治の古典的教科書の中で、政治学者ウィリアム・クリスチャン（William Christian）はカナダ保守主義の主たる構成要素として、①トーリー主義、②懐古主義、③急速な変化への抵抗、④産業自由主義をあげている〔クリスチャン 1989: 133〕。このうち、①については前節でも少し触れたが、カナダの政治的伝統においては国内の分断を避けて公共善を重視する「トーリーの風合い（tory touch）」が保守派の特徴であった〔Dart 2010, 2015〕⁶。そして、ファーニーらの説明を借りれば、

20世紀後半におけるこのトーリー派の影響の末裔のひとつが、レッドトーリーというカナダ独特の奇妙なラベルを貼られた政治潮流である。これは、基本的な人間の尊厳を保障する福祉国家政策を含め、国家による公共財の提供を支持する一連の信条を表している

⁵ 宇野は「国家の積極的介入により個人の自由をはかる」リベラリズムと「『理論による革命』に対して懐疑主義の精神を持って向き合った」自由主義をあえて使い分けている〔宇野 2019: 95〕。いずれもが保守主義とも結びつきうるが、レッドトーリーと結びつくのは前者であろう。

(あるいは表してきた)。「レッド」というラベルは、大幅な再分配政治への献身を意味しており、... 自由市場にある程度の制限を設ける意思を明確に示している [Farney & Rayside 2013: 6]

という意味で、それは大きな政府を志向するリベラル寄りのも — それゆえにリベラルを表象する「赤色」が冠せられた — 保守主義であった。

カナダ保守主義の他の要素のうち、②の懐古主義は過去を懐かしみ肯定する立場であり、どの過去を懐古するかについては国や状況によって異なるが、ここではこれ以上踏み込まないこととする。③についてはパークの議論を紹介する際にすでに触れた。④は経済的自由主義と同義であり、私的所有権や利潤動機を重視し、政府の介入を抑えるべきとする立場を指す [クリスチャン 1989: 133]。この④についてはカナダのレッドトーリー主義では限定的にしか支持されておらず、むしろ後述する新保守主義で重視される点である。

カナダのトーリー保守主義は初代首相ジョン・A・マクドナルド (John A. Macdonald) の時代の自由保守党 (The Liberal Conservative Party) を出発点としている。その後保守党と改名した後継政党は第一次世界大戦の徴兵制導入で国内分断を招き、トーリー主義からも政権からも離れる期間が長かったが、1942 年から 2003 年まではカナダ進歩保守党という党名で主要政党として再び影響力を持つようになり、時に政権を担ってきた。本来ならば対立項となるはずの進歩主義と保守主義が、長らく保守主流派の党名に同居してきたこと自体がカナダ保守の重要な特徴であった⁷。保守の枠組みの中で社会改革などにも取り組む姿勢がこの党名に現れており、まさにレッドトーリー主義に相応しい名称だったと言えよう⁸。

クリスチャンはあまり触れなかったが、トーリー主義とは別に、西部平原地域を中心に展開するポピュリズムの影響を強く受けた保守主義が特に現代カナダにおいては重要である。既成権力を批判して『「人民」は『エリート』による政治的搾取から解放されるべき』だとするポピュリズムは、必ずしも保守派とだけ結びつくわけではない [Farney & Rayside 2013: 43]。他方、第二次世界大戦以前からアルバータ州などを中心に展開した社会信用党のようにベーシックインカムを目指した — つまり金融エリートを批判しつつ大きな政府を志向した — ポピュリスト保守政党も存在しており、必ずしもポピュリストが減税と小さな政府を主張するとも限らない。しかし、1980 年代 — とりわけ

1990 年代 — 以降のカナダで主流となったのは新保守主義であった [岡田 2013: 45-6; 清滝 2017: 139]。

赤字削減、規制緩和、そして民営化 — すなわち小さな政府と自由競争の志向 — を掲げて 1984 年連邦選挙で大勝利を収めたマルルーニー政権の誕生は、カナダの新保守主義にとっての革命的瞬間であったとみなされることもあるが、実際に同政権でそれらの政策を実現しようという動きは遅く小さかった [Farney & Rayside 2013: 65]。政治学者スティーヴ・パットン (Steve Patten) は、「結局、マルルーニーの慎重な現実主義が勝利して、彼は既存の社会制度の普遍性は『神聖な責務 (sacred trust)』であり、決して彼の政権がそれを損なったりはしないと宣言」したと説明している [Ibid: 66]。また岡田も、NAFTA (North American Free Trade Agreement) 導入に向けて新自由主義的な政策に舵を切ったマルルーニーが、ケベック州の独立を防ぐために同州の集团的権利を憲法内に明記しようとした点が、平等を重んじる新保守主義の思想とは決して相容れなかったと論じている [岡田 2013: 37]。結局それらの要素があったからこそ伝統的なレッドトーリーの一定の支持を維持できたとも言えるだろうが、そのことは同時にカナダ西部の保守派の離脱につながり、改革党、そしてアライアンスの政治活動を活性化させた。

なお、新保守主義の外交面での特徴として、アラン・ブルームフィールド (Alan Bloomfield) らは、アメリカ合衆国の著作家アーヴィング・クリストル (Irving Kristol) の説明を援用しながら、愛国心を当然視し、国際機関を信用せず、外国との関係について敵味方を区別し、特に民主主義国家を正義と見なすのが新保守主義外交の特徴だと説明している [Farney & Rayside 2013: 142]。これらのうち愛国心や民主主義はレッドトーリー主義者シーガルにとって重要であったが、後に述べる通り他の 2 点についてはそれらを否定する立場をとった。このように、「2つの保守主義」の間の差異は必ずしも明確ではない点にも留意する必要がある。

3. レッドトーリー主義から新保守主義へ： 分水嶺としての 1993 年連邦選挙

1993 年連邦選挙は、進歩保守党が歴史的な惨敗を喫した一大事であり、この時以降レッドトーリーはかつての勢力を取り戻すことができていない。この大敗北の最大の要因は、明らかにマルルーニー前首相の不人気にあった。閣僚の相次ぐ不祥事や連邦付加価値税 GST の導入が支持低

⁶ その傾向が 1990 年代以降に失われたというのが本稿の論旨であるが、後で説明する通りシーガルは、例えば経済政策においてはハーバー政権にもトーリー的な志向を見出している [Segal 2011: 90]。

⁷ イギリスでもデイヴィッド・キャメロン (David Cameron) 首相 (保守党) が 2009 年に進歩保守主義の採用を宣言した。「保守的な方法で進歩主義的な結果をもたらす」とした彼の姿勢については、Griffiths 2014: 29-41 を参照。

⁸ ただしレッドトーリーという語の生みの親であるギャド・ホロウィッツ (Gad Horowitz) は、進歩的政策を志向する全ての保守主義者をレッドトーリーと呼ぶのは間違いだと述べる [Horowitz 2017]。政治思想の境界線は常に不鮮明であり、結局は本人が自らをどう位置づけるか次第なのである。

下につながったし、ケベック独立運動を抑えるためのミューチレイク憲法改正合意及びシャーロットタウン憲法改正合意の失敗などが国民を失望させ、国内の分裂を深刻にした。ケベックでは州独立を目指す連邦政党ケベック連合（Bloc Québécois, BQ）が誕生して1993年選挙ではケベック州内のみで候補者を擁立して53議席を獲得して野党第一党となった一方で、連邦政府がケベック対策ばかりに追われる状況に不満を持つ西部で誕生した改革党（Reform Party）が同じ選挙で52議席を獲得して野党第二党となった [Anand and Béland 2022]。マルルーニー自身はすでに1993年6月に首相の座を降りてカナダ初の女性連邦首相キム・キャンベル（Kim Campbell）に後を委ねたが、この秋の選挙で惨敗し、彼女自身も議席を失った。結局、カナダ保守の伝統だったワンネーション・トーリー主義は地域ごとの異なる要求に応えることに失敗して、「全国政党」自由党の圧勝—295議席中177議席獲得—を許したのである。

その前回の連邦選挙結果を受けて1988年の下院議会議員名簿に進歩保守党所属議員として名前が上がっていた169名について、1993年選挙とそれ以降の動向をまとめたのが表1である。

1993年選挙を迎える前の段階で党勢はすでに変化し、進歩保守党（PC）所属議員は156名に減少していたとはいえ、それでも295議席の過半数を維持していた。そして、この表で示した通り多くの議員が再出馬を取りやめる中、新人を含め292の選挙区で同党の候補者が擁立された。しかし結果は全体で16%強の支持率を得ながらも、シャレと新人ウェイン・エルジー（Wayne Elsie）の2名だけし

か当選させることができず、進歩保守党は公式政党の地位を失った。

また、1988年時点で進歩保守党に所属していた連邦下院議員のうち、1993年にいずれかの政党で再選を果たしたのはわずか8名であった。また、1997年選挙以降の再出馬状況を見ても、進歩保守党もしくはその後継となるアライアンス、新保守党から出馬したのは23名に留まる。この表には可視化できていないが、さらに言えば、1997年以降に進歩保守党ではなくアライアンスや新保守党から立候補したのは、この169名のうち14名に過ぎない。構成員から見ても、かつての進歩保守党とその後の新保守党は重なりのある薄い別組織であった。

1997年に若くして当選して進歩保守党の希望の星になり、2003年に解党前最後の連邦進歩保守党党首となったピーター・マッケイ（Peter MacKay）は、ハーパーのアライアンスと連携して2003年に新保守党を誕生させた [Farney & Rayside 2013: 69-70]。マッケイはこの新党で副代表を務め、外務大臣、国防大臣、法務大臣など要職を歴任したが、党内でのレッドトーリー勢力の拡大を果たすことはできなかった。

こうしてカナダのレッドトーリーの時代は終焉を迎えた⁹。イギリスでは、2010年代にデイヴィッド・キャメロン（David Cameron）政権で進歩保守主義やレッドトーリー主義が注目されたが [Griffiths 2014; 原田 2023]、カナダでそれが保守主流に再び返り咲くことはなかった。これ以降は、シーガルのような一部の個人が、その主義を貫いて細やかな影響力を発揮するに留まっているのである。

表1：1988年に進歩保守党（PC）所属だった議員の1993年選挙以降の動向

1993年選挙	1993年 結果	1997年以降				
		以後出馬 なし	保守から 出馬	BQから出 馬	自由党か ら出馬	その他か ら出馬
PCから出馬し勝利	1	—	1	—	—	—
無所属で出馬し勝利	1	1	—	—	—	—
BQから出馬し勝利	5	2	1	2	—	—
自由党から出馬し勝利	1	—	—	—	1	—
不出馬	61	58	1	—	—	2
PCから出馬し敗北	97	73*	20**	—	5	3
無所属で出馬し敗北	3	3	—	—	—	—

* この73名には上院議員や州副総督などに就任した政治家も含まれる。

** この中には複数政党を点々とした政治家も含む。

（出典：House of Commons 1988 と Parliament of Canada n.d. のデータを対比させて筆者作成）

⁹ フリーランス研究者ジャレド・ミルン（Jared Milne）は、ハーパー政権にもレッドトーリー主義の影響が強く残っていたと論じている [Milne 2018a / 2018b]。実際に現在でもアメリカ共和党とカナダ保守党のスタンスには違いがあり、後者には「トーリーの風合い」が残っているようにも見える。イデオロギー間の差異は実際にそこまで明確ではなく、何を持ってレッドトーリーとするかの定義も多様であるので、この分析も事実の一面を示しているに違いない。

4. ヒュー・シーガルの保守主義とカナダ

カナダ保守勢力の重心が大きく移動した時代に、レッドトーリーの立場を貫いたシーガルは、当時の政治状況や他の党派勢力をどのように見ていたのであろうか。「はじめに」で触れたシーガルの経歴について、ここでもう少し具体的に説明しながら、彼の保守主義観や政治観について論じていきたい。

彼はケベック州モンリオールで自由党支持者の両親の下に生まれ育ったが、ディーフェンベーカーに傾倒して進歩保守党員となった [Segal 2019: 29]。その後彼が学生自治組織の代表を務めていたオタワ大学在学中の 1970 年に、ケベック解放戦線 (FLQ) のテロ活動に対して戦時措置法が発動され、周辺の学生たちが不当逮捕されるのを目の当たりにした経験は、人権を軽んじているように見えたカナダ自由党のピエール・E・トルドー (Pierre E. Trudeau) 首相に対する根深い不信感を抱く源泉となった [Ibid.: Chap. 8]¹⁰。シーガルは 2019 年の自伝で、彼の周囲の人物の考えや立場を代弁する形を取りながら、彼自身がトルドーや自由党に抱いた否定的な見方を提示している。すなわち、トルドーは民主的な議論を封じ込める権威主義的政治家で、強硬で傲慢かつ無神経であったし、自由党はエリートの政党で硬直した中央集権主義を志向していたように映った [Ibid.]¹¹。敬虔なユダヤ教徒の彼からすれば、多民族多文化を容認すると言いつつ宗教に寛容とは言い難いベラルの姿勢にも抵抗があったのであろう。「政治とは、他者の生活、特に経済的な連鎖の底辺にいる人々の生活を改善し、「家族の食卓に、意見の合わない人たちも含めて居場所を作ること」だと信じたシーガルにとって、それを実現できる可能性があるのは自由党ではなく進歩保守党であった [Ibid.: 87]。

こうして進歩保守党員となったシーガルは、大学卒業後にオタワ・センター地区から 1972 年と 1974 年の下院選挙に立候補したが、どちらも自由党候補者に敗れ、以後は選挙に出ることはなかった。そして既に説明した通り、オンタリオ州デヴィス首相や連邦マルルーニー首相の政策アドバイザーとして、連邦と州の進歩保守党を舞台裏から支える道を選んだ。

シーガルは過去にマルルーニーを支持していなかったのでも、既に人気凋落していた彼から政策アドバイザー就任を請われた時に驚きはしたが、それを政策に関与する好機と前向きに捉えたようである [Segal 2019: 124-25]。必ずしも思想を同じくするわけではなかったが、それでも労働者家庭で育った叩き上げの政治家マルルーニーに対する親近感もあったし、彼にとってマルルーニーはレッドトーリーの立場からも許容できる新保守主義者であった。

1993 年選挙による保守派と地域の分断については既に説明したが、マルルーニー政権以降の 10 年間は、シーガルの目にも「偏狭なイデオロギーと地域の分断に基づく断片化」の時代と映った [Segal 2006: No. 85/3742]。パットンが、1993 年以降のクレティエン政権が結局ネオリベリズム路線を押し進め、「福祉国家カナダにおける連邦政府の役割は『財政健全化』の論理で変容し、縮小と後退の新自由主義の政治が支配的になった」と説明している通り [Farney & Rayside 2013: 67]、マルルーニー後の自由党政権で新保守主義・新自由主義的な傾向が強まる中、シーガルらレッドトーリーは自由党以上に大きな政府を志向したとも言える。

1993 年の連邦選挙での惨敗の後、進歩保守党は若き党首シャレの下で再出発した。1997 年連邦下院選挙では 20 議席を獲得し、いまだ野党第四党とはいえ、再び存在感を取り戻しつつあったが、彼がケベック州自由党に — 州独立運動を抑えるために — 党首として迎えられて国政の場を去ると、議員数 19 名の同党は再び生き残りをかけた厳しい戦いを強いられた。ちょうどその頃、カナダ西部の保守勢力からは「右派結集 (unite the right)」が呼び掛けられており、それに応じて進歩保守党も改革党の後継のアライアンスに合流するのか、それともそのまま少数野党を維持するのかが問われていた [CBC News 2006]。

そこで 1993 年以来オタワを離れていたシーガルがアライアンスへの合流反対の立場で名乗りを上げた。1998 年の連邦進歩保守党の党首選では、シーガルは政策面では減税や国防費の増強、医療制度への再投資などを公約に掲げて参戦し、ジョー・クラーク (Joe Clark) 元首相に及ばないながら善戦している [DeMont and Geddes 1998]。政治評論家としてのテレビ出演などで知名度もあり、楽観主義やユーモラスな語り口もあって「幸福な戦士 (Happy Warrior)」との異名を持つ彼ではあったが、政治の表舞台にいた経験がなかったことやマルルーニー政権に関わった経歴が当選を阻んだ。ともあれ、この党首選の際に示した減税、国際社会への貢献、貧困者支援などはその後も彼のトーリー主義の重要な一部であり続けた。

なお、彼が言う「小文字の c の保守主義」は「大文字の C の保守 (保守党)」の立場とは必ずしも一致しなかった¹²。彼の政治的盟友には自由党員も多くいたし、ここまでも述べてきた通り、1990 年代以降の保守本流となった

¹⁰ シーガルは別の場所では、トーリー主義者の力を借りながらカナダの権利と自由憲章を作り上げたり、中華人民共和国の早期承認やキューバへの継続的な関与したトルドーの「謎の天才ぶり」についても言及している [Segal 2016: 2515/2728]。

¹¹ 自由党がエリートの政党で保守党が非エリートの政党という説明には矛盾があるが、少なくともシーガルはそのような考え方で進歩保守党に参加していた。

¹² 政党名である大文字の保守 (Conservative) と主義思想である小文字の保守 (conservative) の考えが食い違う事態は少なからず生じる。シーガルは自分こそ保守政党の本流という思いで自らを大文字と小文字の保守だと主張したが、21 世紀の状況を考えれば、むしろ彼は小文字の保守の本流からは外れていた。

新保守主義には彼は否定的であった。例えばシーガルは自由党のレスター・ピアソン（Lester Pearson）については、あまり否定的な発言をしていない。彼が「コスト効率に優れた連邦制（*fédéralisme rentable*）」という呼称と共にユニバーサルヘルスケアの連邦レベルへの拡大など社会福祉政策に取り組む様子に共感している [Segal 2019: 80]。また外交面でも、スエズ運河の管理をめぐるイギリス・フランス、エジプト、イスラエルが対峙した1956年のスエズ動乱の際に国連緊急軍派遣を提案してノーベル平和賞を受賞したピアソンは、カナダの国際的なプレゼンスを維持するために軍事力を強化すべきと主張するシーガルの批判の対象とはならなかった [Segal 2011: No. 2934/3689]。それは、同じ自由党のクレティエンやポール・マーティン（Paul Martin）に対する彼の見方とは大きく異なっていた。シーガルは後にマーティン首相から上院議員の任命を受けた立場だが、彼がクレティエン政権の財務大臣として連邦政府から州政府への交付金を削減した点を批判している [Segal 2019: 103]、クレティエンに対してはさらに辛辣であった。シーガルからしてみれば、クレティエンが見せたケベック人のアイデンティティ問題への無神経ぶりも、GST廃止が空手形で終わったことも、州への財政移転や国防予算の削減も、批判すべき言動であった [Segal 2011: 24, 118, 162, 182]。

一方保守派にもシーガルの政敵は少なくなかった。ただし旧来のトーリーの伝統から逸脱したと評されることの多い新カナダ保守党のハーパー政権について、シーガルは当初はそうに捉えず、彼を擁護する姿勢を示していた。保守党議員として上院議会に加わったシーガルは、ハーパーが公共の利益に対する信念を持っていると信じていた [Segal 2019: 136]、ハーパー政権によるGST削減もシーガルの提案に沿う政策であった。そして、「メディアはハーパーを保守主義者の皮を被ったネオコンと見なそうとして必死だが、2008年以降、同政権が行ってきた炭素捕捉新技術への投資、自動車メーカーへの支援、景気刺激策は、…カナダの現実に基づいて形成された、極めて適切で非常にカナダ的な保守主義の系統」に則っていたと受け止めた [Segal 2011: 120]。しかし、その後徐々にハーパーとの溝が広がった。協調ではなく対立を基軸とする政治スタイルも、貧富格差拡大を容認するような政策も、時に人権に十分配慮しない対応も、シーガルのワンネーション・トーリー主義とは相容れなかった [Chase 2013 など]。同様にシーガルは、自分が立案したオンタリオ州ベーシックインカム・パイロット実験を途中で打ち切ったダグ・フォード（Doug Ford）州進歩保守党政権にも厳しい批判の目を向けている [Segal 2019: 177-79]¹³。シーガルが一部の保守に対して強い反感を抱いていたのは間違いない。

結局、「本質的なトーリー主義者とは右や左で定義されるものではないし、過去においてもそうではなかった。そ

の人物は伝統や系譜、礼節、そしてバランスを重視する」と考えるシーガルからすれば [Segal 2006: No. 260/3742]、「適者生存」や「自由放任主義」を標榜しているように見える新保守党の姿勢はレッドトーリーとは別の政治アプローチだったのである。

むすび

本稿執筆の出発点は、保守主義者シーガルへの関心にあった。ベーシックインカム運動の旗振り役を—社会保障の切り捨てではなく改善のために実現しようとする側で—カナダで長年務めてきた彼の保守主義を理解することが、この国のイデオロギー面での特徴を知る一助になると考えたのである。レッドトーリーの衰退というテーマ自体はカナダ研究の文脈でこれまでも扱われてきたが、それを整理して、「2つの保守主義」の間で主流が交代した後もレッドトーリーであり続けたシーガルの視点を検証することが本稿の一番の課題であった。また、レッドトーリーの衰退を決定付けた1993年とその後の選挙結果を追って進歩保守党と新保守党の断絶を明確にすることも課題であった。ワンネーション・トーリー主義を志向した進歩保守党が、ケベック独立運動を契機とする国内分裂に抗えずに衰弱し、新保守主義に座を明け渡した過程である。

シーガルはそのような状況で政治的立場を変えなかった。中央集権的なエリート主義に反発し、貧富や地域の格差をなくそうとした彼の「小文字のcの保守主義」は政党の枠を超え、同じ保守でも新保守主義的な政策には強く反発した。彼はマーティン自由党首相の指名で上院議員に就任したし、貧困対策やベーシックインカム運動では自由党政政治家たちとも手を組んだ。そしてオンタリオ州自由党政権に請われて州ベーシックインカム実験に企画立案から関わったし、彼の政策は一部のリベラル政治家のそれと親和性が高かったのである。

ある人物が自らをどのイデオロギーや政党と結びつけるかは、偶然の要素も働いているに違いない。シーガルが高校時代に聞いたディーフェンバカー首相の演説は、彼自身の記憶によれば以下のような内容であった。

我々がカナダと呼ぶ家族の食卓は、世界で最も素晴らしい。全成員に十分なスペースと食べ物がある。とはいえ私は、人々の肌の色や信じる宗教、あるいは彼らの両親がどれほど富裕になりうるかといった理由で、誰かがその食卓につくのを拒まれることがないように君たちの助けを必要としている。それが農民であれ、漁師であれ、工場労働者、教員、ビジネスマン、看護師であれ、あるいは東部であれ西部であれ、北部であれ南部であれ、そして都市であれ町村部であれ。移民後の第五世代であれ、ちょうど到着したばかりの人で

¹³ カナダ保守党所属の上院議員を経験したシーガルが、オンタリオ州進歩保守党政権の新保守主義を強く批判したように、1990年代以降については、進歩保守党がレッドトーリーで保守党が新保守主義という図式は当てはまらない。

あれ、彼らは皆、家族の一員なのだ。私たちは、全員の権利に敬意を払い、1人ひとりに機会をもたらすカナダを作り上げる必要がある！私はこの部屋にいる全員の助けが必要だ。そのようなカナダと一緒に作り上げるために！[Segal 2019: 28]

ディーフェンベーカーはカナダ政界では傍流のドイツ系移民の息子であったが、貧しいユダヤ系マイノリティ家庭に育ったシーガルが、目の前で現役首相が語るこのスピーチに心動かされたのはむしろ自然であった。ここで留意すべきは、その演説内容が多様性を承認して人権問題の解決に積極的なトルドー自由党の姿勢と差異化できない点にある。大学生だった彼の目には、トルドーは傲慢なエリート政治家と映ったが、カナダに多文化主義を導入したのはトルドー率いる自由党であったし、シーガルが聞いたこの同じ演説を自由党の政治家がしていたら、彼は保守ではなくリベラルの立場から政治の世界に関わり、同じようにベーシックインカムを主張していたのかも知れない。しかし彼は間近で見たトルドー連邦自由党の対応にケベックの自由を踏み躪る中央集権的で不寛容な姿勢を見出して反発を強め、ワンネーション・トーリーの伝統を受け継ぐレッドトーリー政治家の道を進んだのである。

国内の格差や分断を抑えていくこと、そして国際社会で貢献できる強いカナダを作ることが、一貫してシーガルの主題であり続けた。結局彼のレッドトーリー主義とは、中道融和派の政治姿勢と言い換えることが出来よう。政界全体が新自由主義／新保守主義に重心を移していく中、彼らレッドトーリーの立ち位置は、相対的によりリベラル寄りに変化した。そのような論陣を張る彼はカナダ国内で少数派になっていた。

保守とリベラルの政策の違いが比較的少ない現代カナダで、イデオロギーの差異を強調し過ぎるのは正しくないが、自由と秩序のバランスを強調するシーガルの主張に、現代カナダにおけるレッドトーリーの主張を見出すことができる。彼のようなレッドトーリーが増えていけば、例えば貧困問題に対して、カナダがさらに超党派で取り組んでいけるのかも知れない。実際、本稿執筆時点で審議中のベーシックインカム連邦法案に関わる人々は、彼のようなトーリー保守主義者の存在が運動の進展に不可欠だと述べている[CPAC 2023]。しかし現状では、カナダ現代政治の中心にレッドトーリーが再び咲く未来は考えにくい。たとえカナダの保守党にいまだに「トーリーの風合い」が残っていたとしても、本稿冒頭で述べた加米の保守派の差異は、1990年代以前ほどには大きくはなくなっている。その中でシーガルは、残された最後のレッドトーリー主義者の1人だったのかも知れない。

引用・参考文献

宇野重規 (2019) 『保守主義とは何か—反フランス革命から現代日本まで』 中公新書。
岡田健太郎 (2013) 「カナダにおける新しい保守主義の興

隆—『レッド・トーリー』から新自由主義へ—」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』2巻。
加藤普章(2002)『カナダ連邦政治—多様性と統一への模索』東京大学出版会。
清滝仁志 (2017) 「ジョージ・グラントにおけるリベラリズム批判」『駒澤法学』16巻4号、3月。
久米郁男他 (2011) 『補訂版 政治学』有斐閣。
クリスチャン、ウィリアム (1989) 「第4章 カナダにおけるイデオロギーと政治」(ジョン・H・レデコップ編、吉田健正・竹本徹訳『カナダ政治入門—カナダ政治理解への多角的アプローチ』御茶の水書房。
田中俊弘 (2024) 「カナダにおけるベーシックインカム運動の歴史と現状：コロナ禍以降の最近の議論と動向を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』6月号：2-15。
中岡望 (2004) 『アメリカ保守革命』中公新書ラクレ。
原田健二郎 (2023) 「現代イギリスにおけるポストリベラルな政治の展開—フィリップ・ブロンドのレッド・トーリー主義—」『アカデミア』(南山大学紀要 社会科学編) 第24号、1月。
吉田徹 (2020) 『アフター・リベラル—怒りと憎悪の政治』講談社現代新書。
CBC News (2006) "Unite the right: Timeline," updated: Feb. 2, <https://www.cbc.ca/news2/background/conservativeparty/uniteright_timeline.html>。
Chase, Steven (2013) "Tory against Senate suspensions is no stranger to breaking ranks," *Globe and Mail*, Oct. 25, <<https://www.theglobeandmail.com/news/politics/tory-against-senate-suspensions-is-no-stranger-to-breaking-ranks/article15101129/>>。
CPAC (2023) "Parliamentarians discuss universal basic income bill — October 17, 2023," YouTube, Oct. 18, <<https://www.youtube.com/watch?v=qaOuZTuDZ-Y>>。
Dart, Ron (2010, 2015) "Red Tory," *The Canadian Encyclopedia*, Last edited June 22, 2015, <<https://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/red-tory>>。
DeMont, John and John Geddes (1998) "The race begins," *Maclean's*, 111, June 22: 16-17.
Farney, James, and David Rayside, eds. (2013) *Conservatism in Canada*, Toronto: University of Toronto Press.
Griffiths, Simon (2014) "What was Progressive in 'Progressive Conservatism'?" *Political Studies Review*, vol. 12.
Horowitz, Gad (2017) "The deep culture of Canadian politics: Fragment theory and the fate of the red tory meme," *Inroads*, Issue 40, Winter/Spring <<https://inroadsjournal.ca/issues/issue-40-winter-spring-2017/>>。
House of Commons, Canada (1988) *Debate*, vol.1, Ottawa: Queen's Printer for Canada.
Marshall, Catherine (2023) "Introduction: 'One Nation Conservatism from Disraeli to Johnson'," *French Journal of British Studies*, 28(1).
Menon, Anand, and Daniel Béland (2022) "Is the

- Conservative party heading for a 1993 Canada style collapse?" *UK In A Changing Europe*, Dec. 01, <<https://ukandeu.ac.uk/is-the-conservative-party-heading-for-a-1993-canada-style-collapse/>> .
- Milne, Jared (2018a) "The Hidden Strength Of Red Toryism In Canada, Part One," *Medium*, July 23, <<https://jared-milne.medium.com/the-hidden-strength-of-red-toryism-in-canada-part-one-4ab21881bc>> .
- _____ (2018b) "The Hidden Strength Of Red Toryism In Canada, Part Two," *Medium*, July 23, <<https://jared-milne.medium.com/the-hidden-strength-of-red-toryism-in-canada-part-two-aef09ba57da3>> .
- Moore, Michael (2007) *SiCKO*, (DVD), Dog Eat Dog Films (邦題『シッコ』) .
- Padmanabhan, Leala (2015) "'Conservative' or 'Tory': What's in a name?" *BBC News*, April 8, <<https://www.bbc.com/news/uk-politics-30899534>> .
- Parliament of Canada (n.d.) Parliamentarians, <https://lop.parl.ca/sites/ParlInfo/default/en_CA/People/parliamentarians> .
- Sanders, Bernie, Official Site (n.d.) "Issue—Health Care as a Human Right: Medicare for All," <<https://berniesanders.com/issues/medicare-for-all/>> .
- Segal, Hugh (2006) *The Long Road Back: Creating Canada's New Conservative Party*, Toronto: Harper Collins Canada (Kindle 版) .
- _____ (2011) *The Right Balance: Canada's Conservative Tradition*, Vancouver: Douglas & McIntyre (Kindle 版) .
- _____ (2016) *Two Freedoms: Canada's Global Future*, Toronto: Dundurn (Kindle 版) .
- _____ (2019) *Boot Straps Need Boots: One Tory's Lonely Fight to End Poverty in Canada*, Vancouver: On Point Press.
- (以上のインターネットサイトについては2024年7月19日に全て再アクセスし、更新や削除がなされていないことを確認済みである。)